

④海外・国内）出張報告書（学生用）

2013 年 2 月 12 日提出

氏名	丸山 隼輝
所属	人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門
学年	博士課程 1 年
出張先	タイ王国バンコク
出張期間	2013 年 1 月 27 日～2 月 3 日
目的	Prince Mahidol Award Conference 2013 に Rapporteur として参加

活動内容

今回、タイ王国のバンコク市内で行われた Prince Mahidol Award Conference 2013 (PMAC) に Rapporteur（書記）として参加した。今回の PMAC は “One World - One Health” をスローガンに掲げ医学、獣医学、公衆衛生、環境学などの各部門が主に感染症制圧に向けて力を合わせることを目的として開催された。私は Rapporteur として担当セッションの発表・質疑応答の記録、まとめをタイ人 2 人、ケニア人 1 人とチームを組み行った。

学会初日、開会式は大小合わせて 5 つのモニターのある大きな会場で行われた。今回の学会は世界保健機関（WHO）、国際獣疫事務局（OIE）、国連食糧農業機関（FAO）など複数の国際機関から参加者が多数集まっており、複数の演者が機関の壁を超えた協力体制が非常に重要であることを訴えていた。私は午後からのセッションの担当であったので、午前中の発表は自由に聞くことが可能であり、非常に有意義な時間を過ごす事が出来た。最初のセッションは“One World・One Health”の実現のために各機関の連携・協力がどれほどに重要であるかを説くものが主であり、本学獣医学研究科が目指すものの重要性を再確認することが出来た。



図 1. 学会メイン会場の様子

巨大なモニターが 5 つ並んでおり、学会の規模の大きさを感ずることが出来る。

2 つ目のセッションでは、本学獣医学研究科微生物学教室の迫田准教授も演者として参加しており、実際の疾病発生事例に関する疫学研究を基にした発表を行っていた。鳥インフルエンザとブルセラ病についての発表ではあったが、私の専攻する分野と関連する部分が多く、非常に興

味深く聴くことが出来た。

午後の私の担当であるセッション PS 2.1 “Achievements and Gaps in One Health Surveillance” はサーベイランスに基づく疫学研究と疾病制圧のための各機関の協力の必要性について発表・議論するものであった。その中でも Justin Masumu 博士のコンゴ共和国で発生したエボラ出血熱およびマールブルグ熱の事例についての発表は私の研究しているフィロウイルス感染症についてのものであり、実際の現場で何が行われているかを知ることが出来たことは大きな収穫であった。発表内容については“One Health”実現のため、いかに垣根を超えた協力が重要なのかを説く漠然としたものもあったが、実際に起きた事例についてのものは研究者としての自分にとっては非常に有益であった。また、複数の国から集まったチームで発表をまとめることは英語の重要性を再認識すると共に、各国での疾病制御に対する認識の違いを知ることが出来た。さらに私の所属していたチームは大学教員、保健相の役人、博士課程学生と様々な機関に所属している人が集まっており、この学会の基本理念である機関の壁を超えた協力の縮図であった。



図 2. Rapporteur の様子

Rapporteur として発表を聴き内容をまとめている様子。この後、チームの 4 人で発表内容について議論し、最終的にまとめたものを提出した。

二日目は Rapporteur としての業務も完了していたので、自分の興味のあるセッションを自由に聴くことが出来た。特に企業の研究者が発表していた産業界の視点から見た“One Health”の実現については普段の学会では、なかなか聴くことのできたいものであり興味深かった。

学会の最後のセッションとして、我々を含む各 Rapporteur チームがまとめた全てのセッションについての総評が行われた。我々のセッションでの議論が多く挙げられており、Rapporteur チームとしての業務を評価していただくことが出来た。



図 3. 総評の様子

リーディングセミナーで本学でも講演なされた Jonna A.K. Mazet 博士が Rapporteur チームを代表して各セッションのまとめを発表している。

今回参加した PMAC は全体的に研究に基づいた発表よりもむしろ、各機関の連携・協力の重要性についての政治的な話が多く、普段参加する学会では聴くことがないものが多かった。僅かではあった、実際の事例に基づいた話は非常に興味深く聴くことが出来た。また、各国の著名な先生方や、国際機関の代表者の参加も多く、それらの方々と知り合う機会を得られたことは大きな収穫であった。さらに、**Rapporteur** として参加したことは初めての経験であり、発表内容をまとめ、チームの一員として英語で議論をしたことは貴重な経験であった。

最後に、今回の PMAC の参加を通して、本学獣医学研究科の“**One World – One Health**”の実現に対する貢献の必要性の高さを実感することができ、グローバルリーダーとなることの重要性を改めて理解することが出来た。また私の所属する人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門の世界での役割を部分的ながらも知り、自分の将来のビジョンの参考になったことが、最も大きな収穫であった。